

戸田市文化財調査報告 I

# 鍛冶谷遺跡第1次発掘調査概報

埼玉県戸田市教育委員会

昭和42年



# 序

教育長 岡 田 弘

わたくしたちの郷土戸田市が由緒ある歴史をもつことは、鎌倉幕府の直轄地としての謂れや、室町時代の蔵城のありかの再検討などを通して、もはや疑う余地がありません。が、それらを遙かに絶した弥生式時代の遺跡もここにあり、それも方形周溝墓によって特徴づけられる地域であろうなどは、素人の私にはとても想像つきませんでした。はしなくも昨夏、柳田、塩野両先生のご指導を仰いで敢行した本市最初の発掘によって、その事実が白日のもとにもたらされたのです。

塩野先生は、かつて戸田東中で教鞭をとって下さった関係から、特にいつもご無理をお願いし、なにかと面倒をみていただいておりますが、面白いことに、先生ご自身、戸田くらい詰らぬところはないと早合点されていたとか、今では嘘のような一ツ話すらあるくらい、戸田は容易にそのヴェールを脱ごうとはしなかったのです。

今回の成果は、掘ってびっくり。先生のあわてふためく様が目に見えるようで愉快です。

さて、発掘は炎天下、いいとして進められました。ところが、普通と逆で、日が経つにつれて作業に加わる方の数は増えていったのです。

実際、この発掘の成功は、市長はじめ、市議会、県・市文化財保護委員会、県史料室、地元町内会ならびに婦人会、市文化財研究会、国学院大学、戸田高等学校、蔵高等学校、その他有志の皆様が、それぞれの立場から当市教委にお寄せ下さった深いご理解と、ご指導・ご協力の賜物にほかなりません。

このたび、塩野先生を煩わして「鍛冶谷遺跡第一次発掘調査概報」が成るにおよび、関係各位にたいし、改めて深く御礼申し上げますとともに、永遠の眠りを眠る先人の霊の安からんことをひたすら祈念するものです。

ここに拙文を草して序とします。



## 例 言

1. 本書は、昭和42年8月6日～12日に実施した、戸田市上戸田所在の鍛冶谷遺跡第1次発掘調査の概報である。
2. 遺跡は、鍛冶谷町と新田口町にまたがっているが、便宜上、最初に土器が発見された鍛冶谷の地名をとって「鍛冶谷遺跡」と称した。
3. 発掘調査は、戸田市教育委員会が主体となり、実施した。
4. 発掘担当者には、柳田敏司（社会教育課専門員兼文化財係長）、塩野 博（埼玉会館郷土資料室）が当り、国学院大学学生及び、県立戸田高等学校、県立蕨高等学校生徒諸君の応援を得た。
5. 本書は、塩野博が執筆したが、出土遺物の項は、伊藤和彦と合筆した。ただし、加除筆の責は、柳田敏司が負うものである。
6. 本書の挿図、及び図版は、塩野と伊藤が作成し、増田逸朗氏の援助があった。
7. 発掘参加者は、次の通りである。

（国学院大学生）伊藤和彦，下沢公明，高橋一夫，斎藤和子，岩崎真純

飯田良雄，岡田恒三郎，駒崎 実，江上邦泰，榎本武雄，榎本一夫，榎本忠次，榎本 清，  
遠山てる子，金子 弘，岸沢真理子

（蕨高等学校）羽柴伸一教諭 外20名

（戸田高等学校）高山 一教諭 外36名

（川 口 芝 中）板倉八重教諭 外4名

（鍛冶谷婦人会）榎本裕子 外 （新田口婦人会）大西てつ 外

（教育委員会）岡田 弘，石田英三，奥墨修一，長谷川忠信，松井 清，岩谷 務，

稲垣賢一



# 戸田市文化財調査報告 I

## 鍛冶谷遺跡第1次発掘調査概報

### <目 次>

序	教育長 岡 田 弘
例 言	
はじめに	1
1. 遺跡の位置と環境	1
2. 発掘調査	2
(1) A地区(鍛冶谷)の調査	2
(2) B地区(新田口)の調査	3
3. 遺構の概要	4
(1) 方形周溝	4
(2) 住居址	7
4. 出土遺物	7
(1) A地区第1号方形周溝, 溝内出土の土器	7
(2) A地区第2号方形周溝, 溝内出土の土器	8
(3) B地区第1号方形周溝, 溝内出土の土器	9
(4) B地区住居址出土の土器	14
(附)	
塙構遺跡出土の土器	16
おわりに	17

## <図 版 目 次>

- 図 版 I 遺 跡 遠 景  
A地区第1, 2, 3号方形周溝
- 図 版 II A地区第1号方形周溝の土器出土状態
- 図 版 III B地区第1, 2号方形周溝  
B地区第1号方形周溝の土器出土状態
- 図 版 IV 住 居 址  
甗セット出土状態  
小形台付甗出土状態
- 図 版 V A地区第1号方形周溝出土の土器

## <挿 図 目 次>

- 第 1 図 鍛冶谷遺跡(×)印と周辺の地形
- 第 2 図 第1次調査地区の位置図
- 第 3 図 A地区第1, 2, 3号方形周溝実測図
- 第 4 図 B地区第1, 2号方形周溝実測図
- 第 5 図 B地区住居址実測図
- 第 6 図 A地区第1, 2号方形周溝内出土土器
- 第 7 図 B地区第1号方形周溝内出土土器
- 第 8 図 B地区第1号方形周溝内出土土器
- 第 9 図 B地区第1号方形周溝内出土土器
- 第 10 図 B地区住居址出土土器
- 第 11 図 塙構出土の土器

## はじめに

昭和42年5月25日、戸田市上戸田1058番地榎本 清氏宅の前の畑に、鯉のぼりのポールを立てる作業が行なわれた。この時、作業にあっていた、榎本武雄氏のエンピに先に、一片の土器片がついてきた。氏は、戸田市文化財研究会のメンバーで、郷土史に興味をもつ一人である。早速、このことを戸田市教育委員会に連絡した。戸田市教育委員会では、戸田市文化財保護条例ができて以来はじめての発見であり、教育長以下、社会教育課の職員をはじめ、文化財保護委員長、岡田恒三郎氏が、慎重に、この作業に立ち合った。

この日のうちに、塩野に連絡があり、現場に急行した。発見された土器片は、すでに水洗され、地主の榎本家に保管されていた。発見の経緯や、発見時の状態をきき、土器を観察した。土器片は、2個体分あり、弥生時代後期中葉の弥生町式土器そのものである。これまで、戸田市において、このように、弥生時代の遺物が発見されるとは信じられなかった。したがって、これらの土器が、いかなる遺構から出土するのか、学術的な説明が要求された。

その後、数日して、同市躊構からも、この鍛冶谷町で発見されたものと同時期の大きな壺形土器が、戸田中学校の生徒により発見され、戸田市教育委員会に届けられた。

戸田市教育委員会では、これら一連の発見を重視し、出土地点を中心として、徹底的にこの遺跡の性格を明らかにすべく、発掘調査の計画を立てた。発掘調査に係る、所定の手続きをすませ、7月26日、戸田市中央公民館に、文化財保護委員、地主、地元町内会長、発掘協力者の代表が集まり、発掘調査の打合せ会が催された。

発掘調査は、県教育局の柳田敏司、埼玉会館郷土資料室の塩野博が担当者となり、8月6日～12日まで行なうことになった。この調査には、県立蕨高等学校、県立戸田高等学校の先生や生徒諸君、地元鍛冶谷町会、新田口町会の方々の協力も大いに得られることになった。

### 1. 遺跡の位置と環境

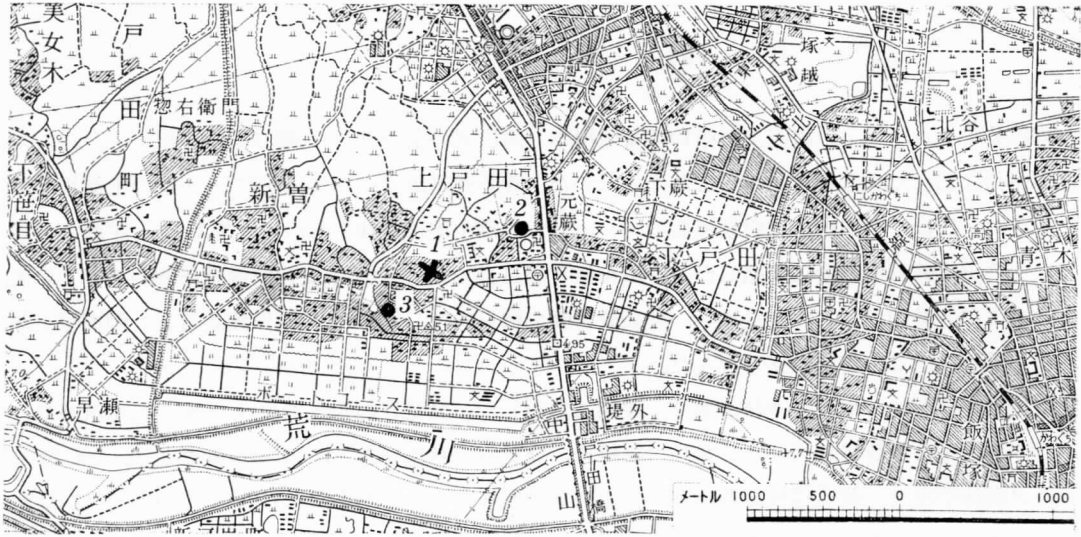
遺跡は、埼玉県戸田市上戸田1058番地にある。附近は、すでに土地区画整理事業が終り、整然としている。東京から近い関係もあり、旧家に混って、新しい家屋も多く建設され、新興住宅地化されつつある(図版I)。

この遺跡は、標高5m弱の、旧入間川(現荒川)の、西から東へのびる細長い自然堤防上北側に位置する(第1図×印)。この辺一帯は、戸田市内でも比較的高所で、中央に県道(白子新道)が走っている。

現在の荒川は、沖積地を隔てて、この遺跡の南方1,200mを東流している。一方、北側は蕨市を中央に置く、広い沖積地を隔てて、大宮台地と対している。

これら、南と北に広がる沖積地は、水田を埋めて宅地化も進んでいるが、水はけが悪く、二毛作のできない地域であり、遺跡付近では、水の流出するところがなく、沼化しているところが多





第1図 鍛冶谷遺跡(×)印と周辺の地形

い。

この遺跡の所在する自然堤防は、火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色粘土層を基盤とする低平な微高地である。表土は、粒子のこまかい灰色を呈したものである。2層目は黒色土で、かたくしまっている。3層目が黄褐粘土層である。

この遺跡では、土器の表面採集は、ほとんどできない。したがって、遺跡があるにもかかわらず、表面上では、その範囲をつかむことが不可能な地域でもあった。したがって、戸田市の遺跡は、当然このような場所に位置しているのだから、偶然による発見しか、それを確かめることができない。鍛冶谷遺跡の東方約800mに、塙構遺跡が発見されており(第1図2)。また本村には、戸田市唯一の古墳(円墳)があり、その周辺の畑には、土師器の散布が認められている(第1図3)。

## 2. 発掘調査

鍛冶谷遺跡の調査区は、区画整理の地割りに従ってつけたもので、各調査区の位置、及び調査範囲は、第2図の通りである。

なお、今回は、A地区に調査の主眼がおかれ、B地区およびその他は、今後改めて調査を予定している地区である。

### (1) A地区(鍛冶谷)の調査

この地A区は、今回の調査の契機をつくった土器の出土した土地である。

発掘予定地区に幅2m、長さ25mのトレンチ3本を設定し、ただちに発掘にかかった。この地は、畑地として、発掘前まで、ナスやトウモロコシがつくられ、また植木があったところで、第1



第2図 第1次調査地区の位置図

層の表土 20cm は、スムーズに掘ることができたが、第2層のやや青味がかかった黒色土は、固くしまっていて、容易に掘ることができなかつた。3本のトレンチとも、地表面から 60cm のところで、基盤である黄褐色粘土層上面に達し、幅 2m の溝状遺構を発見した。発掘調査区も狭いことなので、溝状遺構の性格をみるため、拡張しつつ、全面黄褐色土層まで現出し、方形に囲る溝状遺構 3 か所と、南東すみに、溝状遺構の一部を確認したが、道路により切断されていた。ここで発見された溝状の遺構は、現在、注目されている。方形周溝であり、調査前に発見された弥生町期の壺形土器も、この溝の中から出土したことも判明した。

## (2) B地区(新田口)の調査

B地区は、新田口町会に属する公園敷地内で、A地区の調査と平行して、A地区に近い公園の北

東隅に、幅1m、長さ20mのトレンチ2本を設定し、A地区の範囲を握むため試掘したものであ

公園化されているため、表土の一部が削平され、A地区の第2層（黒色土）が表面に出ている部分もあり、固く容易に掘ることができなかった。しかし2本のトレンチとも、東端と中央部に溝状の遺構、西端に、堅穴遺構を発見、覆土中より小形台付甕や若干の土師器片が発見された。

今回のB地区の調査は、あくまでも試掘であって、遺構全体の現出は、堅穴遺構のみにして、遺憾ながら溝状遺構については、次回の調査にゆずることにした。

### 3. 遺 構 の 概 要

A、B両地区の調査で、発見した遺構は、方形周溝6基と、住居址1基である。B地区の方形周溝については、完掘していないので、詳細については、第2次調査にゆずり今回は、調査できた範囲内を報告する。

#### (1) 方 形 周 溝

A地区で発掘された、方形周溝は、3基である（図版Ⅰ）（第3図）。

**第1号方形周溝** 北溝は、宅地となり調査できず、全形を知ることができなかった。周溝は、隅丸方形のプランをもち、西南の一部で周溝を欠き、さらに、西溝が第3号方形周溝に切断されている。大きさは、東西13m、溝の幅は、東溝1.30m、南溝1.70m、西溝1.30m、コーナーで1.00mを測る。

溝底は、平らで、コーナー付近が浅く、中央にかけて深くなる、いわゆる舟底形を呈している。

なお、南溝に、高さ10cm、幅30cm、長さ1.2m程のテラス状を呈したところがある。

溝中の土層は、最下層に黄色粒子が混った黒褐色土が堆積し、その上に黒褐色粘土がある。

方台中央部に、幅70cm、深さ12cmの方形の土壌が検出されたが、第3号方形周溝に切られて全体のプランを現出することができなかった。また、南溝に平行して、長さ8.20m、幅60cm、深さ10cmの溝が走っている。

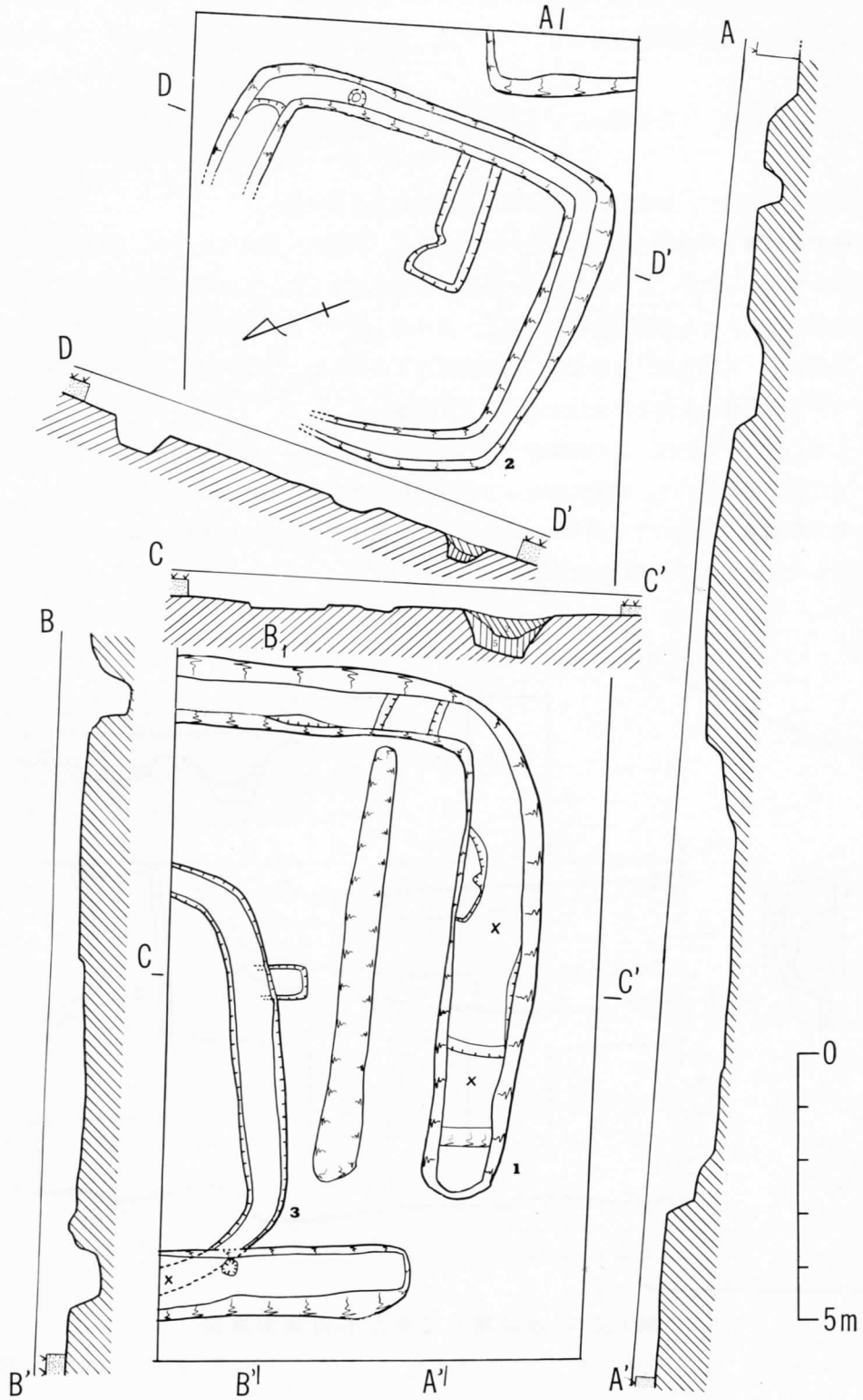
遺物は、東溝、黒褐色粘土の上部から、破片2個出土、西溝では、第3号方形周溝の底部下より、坏形土器が出土した。南溝は、焼成後穿孔の壺形土器2個、台付甕形土器1個が発見された。このうち、壺形土器1個と、台付甕形土器1個は、調査前に出土したのであるが、今回の調査で、それが、配置されていた位置を確認できた。また、出土した壺形土器は、口縁を北に向けて、横転していた（図版Ⅱ）。

**第2号方形周溝** A地区の東端で発見されたもので、東西6.10m、南北7.50m、の方形を呈すが、北側が攪乱され、完全な形で現出しなかった。溝は、南溝で深さ40cm、北溝50cmで、堆積状態は、第1号とほぼ同じである。

方台部は、比較的平らであるが、東から西にかけて、溝が発見されたが、この2号に切られている。なお、中央部には、壙状の遺構はなかった。

出土遺物は、土器底部1個である。





第3图 A地区第1, 2, 3号方形周溝实测图

**第3号方形周溝** 東西約8m, 幅1m, 深さ0.1mを測るものであるが, 東溝と, 西溝の一部のみで, 他は調査不可能な状態であった。プランは, 方形がややくずれ, 東西の溝は, 若干外に彎曲している。

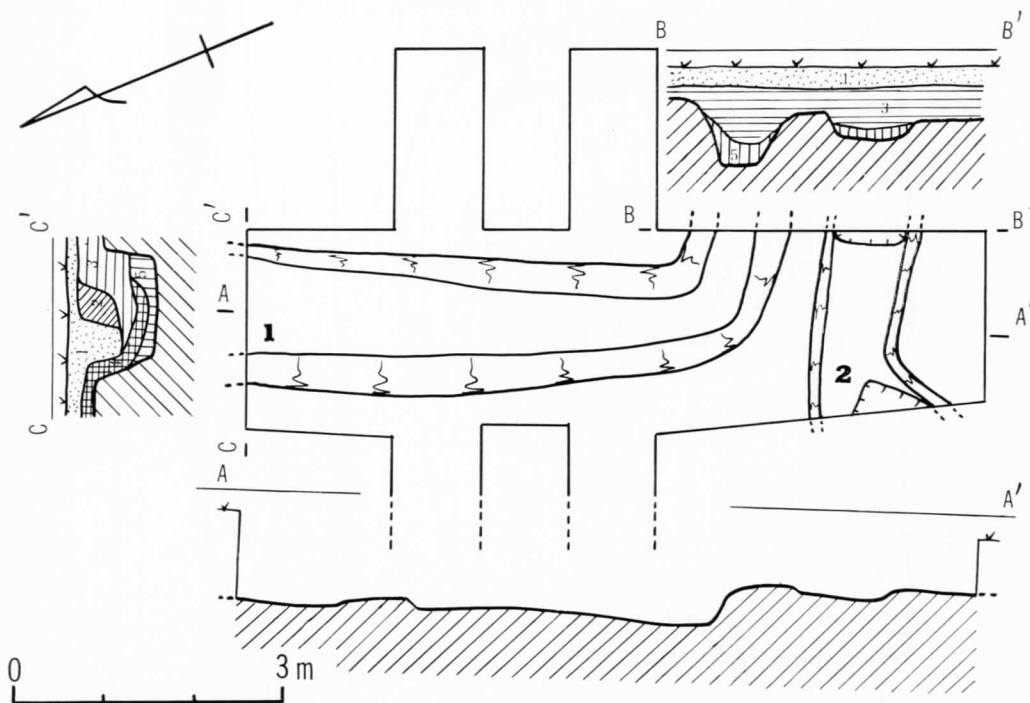
なお, この遺構は, 1号を切っている。出土遺物は, 皆無である。

B地区の方形周溝は, 完掘したものはない(図版Ⅲ)(第4区)。

**第1号方形周溝** 西溝の一部を調査したのみである。溝幅は, 中央で1.60m, 深さ60cmを測る。調査範囲は少なかったが, この溝からは, 土器が多量に出土した。しかも, その状態は, 溝内上部の, 方台部から流れこんだ暗褐色粘土層上に, 高坏形土器や, 台付甕形土器などが一括出土し, さらに, 溝底にも, 鉢形土器, 壺形土器, 高坏脚部などが出土し, 上層でみられた楕状工具による整形痕のついた台付甕形土器の出土はなかった(区版Ⅲ)。

かくして, この1号では, この周溝がつくられた時と, しばらく時間をおいて, かなり埋没してから, また利用するという, 二度にわたって使用された事実をみることができた。

**第2号方形周溝** 1号のすぐ南50cmのところの位置するもので, 溝幅1m, 深さ25cmを測る。調査した範囲での出土遺物はない。



第4図 B地区第1, 2号方形周溝実測図

0.86

(1. 褐色粘土層 2. 黒褐色粘土層 3. 暗褐色粘土層 4. 茶褐色粘土層 5. 黄色粒子混黒褐色土層)

## (2) 住 居 址

### B地区住居址 (図版IV) (第5図)

床面が黄褐色土層で、壁が黒色土であるためと、水をかぶっている関係上、土の粒子が細かく、硬くしまつて、壁を確認することが不可能な状態であった。しかし、硬い床面であったため、これを中心に追求し、竪穴住居址のプランを確認した。

プランは、若干胴の張った隅丸長方形を呈し、長径7.7m、短径6.5m、東コーナーの壁高20cmを測る。床面には、6つのピットが確認された。また、南のコーナーに、台形プラン、深さ20cmの貯蔵穴があり、内部に、甌のセットが、北向きに倒れていた。焼土は、中央より西に認められた。

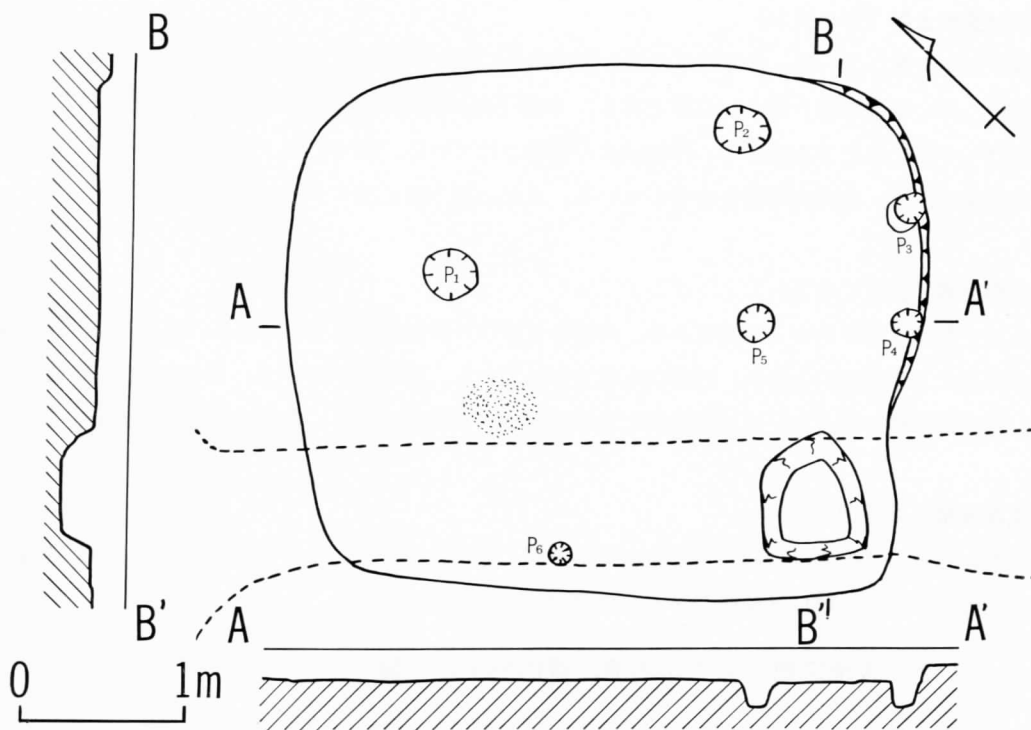
なお、この住居址より下に、幅1.5cmの溝状遺構がある。

## 4. 出 土 遺 物

### (1) A地区第1号方形周溝、溝内出土の土器

#### 壺形土器 (図版V) (第6図2, 3)

2. 今回の調査の契機となった土器である。頸部は、ゆるやかに「く」の字状に折れ、口縁部が



第5図 B地区住居址実測図



大きく外反し、口唇部に2つの稜を有する。また、頸部から胴部にかけては、ゆるやかなカーブを描き、胴部最大径が下半部にあるが、ほぼ球形を呈し、底部にいたる。底部は、平底で、焼成後の穿孔がある。

肩部に細縄文（RL・LR 2本立の結束のある羽状縄文）が施され、頸部には2段、胴部に3段のS字状結節文がつけられ、細縄文を界している。さらに、肩部には、6個を単位とする円形浮文が4か所に貼り付けてある。また、口縁部内側にも細縄文が施文され、3段のS字状結節文が細縄文を界し、その中に6個を単位とする円形浮文が4か所貼り付けてある。

整形は、頸部と胴下半部、及び、内面がヘラ状工具で研磨されている。胎土は、微礫を多少含有しているが、良質の粘土で良く精選されている。焼成は、ひび割れが目立っているが堅緻である。色調は、薄茶褐色を呈す。

3. 幅の広い折り返し口縁で、4か所に6本づつの棒状隆起がついている。頸部は、ゆるやかな弧を描き、口縁部が、わずかに内彎する。胴部の最大径は、下部にあり、球形を呈している。底部は、平底で、焼成後に穿孔している。

文様は、折り返えし部、及び、肩部から胴部にかけて細縄文が施され、その上に、円形の朱文がつけてある。口唇部にも、RLの細縄文が施文されている。

内外面の整形には、ヘラ状工具が使用されている。胎土は、微礫を含むが、良質の粘土である。焼成は、堅緻で、色調は薄茶褐色を呈す。

#### 台付壺形土器（第6図1）

胴下部を欠損している。ほぼ球形に近い胴部から、緩やかに「く」の字状に折れ、口縁となる。口縁は、細い带状の折り返えし口縁である。口縁下部には楕状工具による整形痕が見られるが、大部分はヘラ状工具による整形で、器面はよく研磨されている。胎土には、微砂が含まれている。焼成も堅緻である。色調は茶褐色を呈している。また、胴下部にはススの付着が認められる。

#### 坏形土器（図版V右下）

この土器は、膨みをもった底部から、内彎しながら口縁部に移るものである。外面には、淡い楕歯状工具による沈線がみられ、内面にも施文されている。整形が不十分で、器面は起伏がはげしい。胎土は砂粒子を含む。焼成は器面に荒れが目立つが堅緻である。色調は黄褐色である。

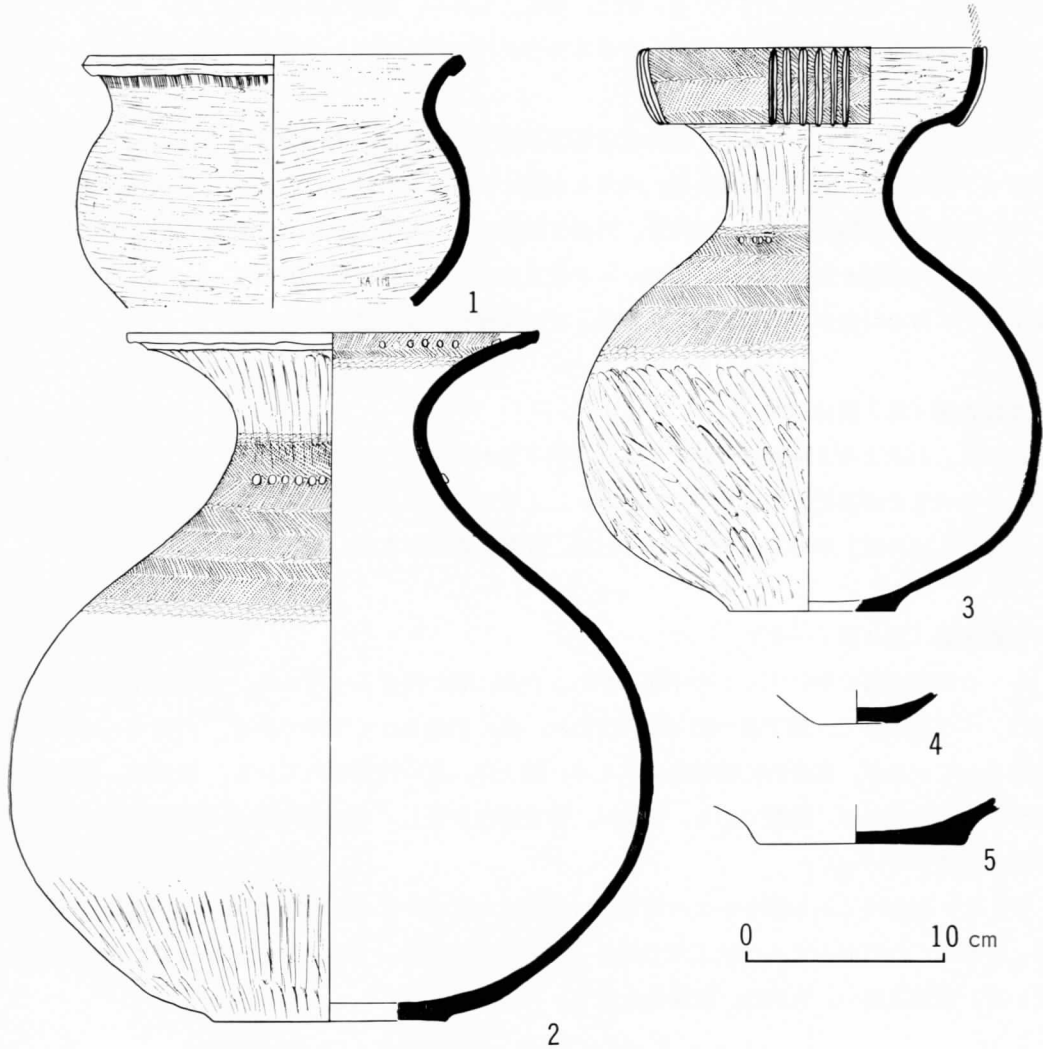
#### 土器底部（第6図4）

胴部からそのまま底部に移行するものであるが、底部はやや上底である。胎土は、砂粒子を含み、粗雑であるが、焼成は堅緻である。色調は、褐色を呈す。

### (2) A地区第2号方形周溝、溝内出土の土器

#### 土器底部（第6図5）

A地区第2号方形周溝の溝内から出土した土器は、この平底を呈する底部のみである。色調は灰



第6図 A地区第1, 2号方形周溝内出土土器

褐色を呈す。

(3) B地区第1号方形周溝, 溝内出土の土器

壺形土器 (第7図1~9)

1. 口縁部が頸部から漏斗状に開き, 複合口縁がわずかに立ちあがっている。口縁折り返し部には, 4本を単位とする棒状隆起が4か所に付されている。胎土・焼成とも良く, 赤黄褐色を呈す。
2. 頸部以下を欠損している。頸部は, 「く」の字状に折れ, 外側に鈍い稜をつくり, 口縁は斜上方にのびる。色調は, 黒褐色を呈す。
3. 幅の広い複合口縁を有するもので, 器面は無文, 平滑である。色調は, 赤褐色を呈す。
4. 幅の広い複合口縁を有し, 折り返えし部分の下端に小さな押捺痕が見られる。口唇部には,

きわめて細かい縄文が施されている。胎土、焼成とも良く、色調は茶褐色を呈す。

5. 口縁部を欠き頸部のみで、稜を有する突帯が付けられている。胎土・焼成とも良く、色調は赤褐色を呈す。

6. 頸部は鋭く折れ、口縁は、漏斗状に外方に開く。整形は、櫛歯状工具を使用しているが、内面はへら状工具による。口唇部には、内外とも横ナデ痕が見られる。色調は、黄褐色を呈す。

7. 頸部は、直線的に緩やかに開き、外面は研磨され、平滑である。色調は、黄褐色を呈す。

8・9. 口縁部を欠く小形の土器で、へら状工具による粗雑な整形痕が残っている。両者とも、胴下部にススの付着が認められる。色調は、8が灰褐色、9は淡黄褐色を呈す。

#### 土器底部（第7図10～26）

底部は、おおよそ2種類に大別できる。①胴下部が一度くびれてから底部にいたるもの（10～20）。そのまま底部にいたるもの（21～26）。この中で、いずれも平底であるが、上げ底を呈するもの（15・16・22）がある。また、10・11は、底部に穿孔がある。

#### 鉢形土器（第8図1～3）

1. 口縁部は緩やかに「く」の字状に折れ、内面に鋭い稜をもっている。底部は平底である。整形は、へら状工具で、斜下方へ向って行なわれ、良く研磨されて平滑である。内面もへら状工具で整形されているが、部分的に輪積痕もみえる。胎土は、良く精選されている。焼成は、器面に荒くひびが入っているが、堅緻である。色調は、淡黄褐色を呈し、部分的ではあるが内外面に丹塗り痕がみられる。

2・3. 底部近くから緩やかに内彎し、口唇部にいたる。2の口唇部には、丸い突出し部がある。整形は、内外面ともへら状工具で行なっている。胎土は、ともに砂粒子を含むが良く精選されている。焼成は良い。色調は、淡褐色を呈す。

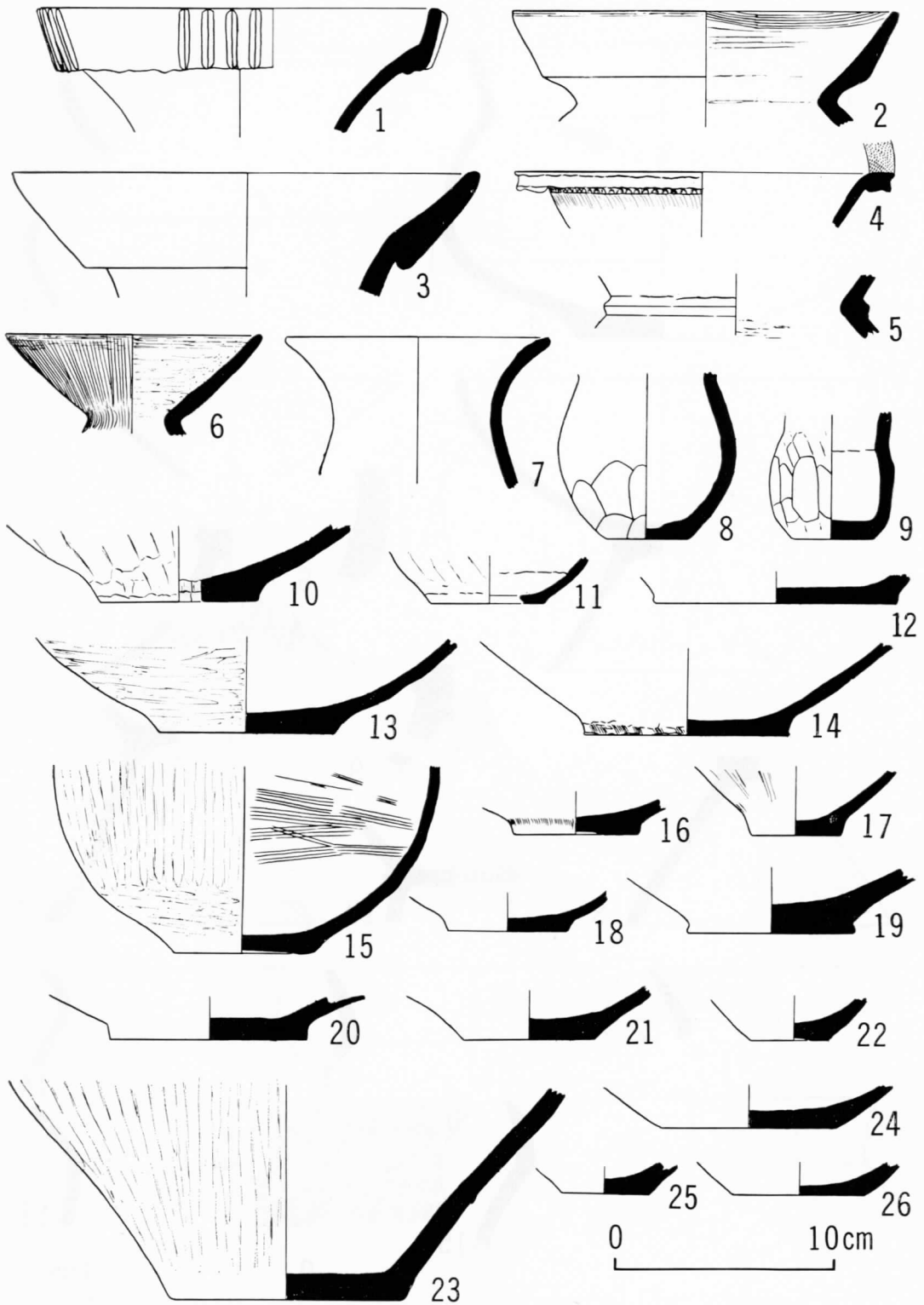
#### 高环形土器（第8図4～11）

4. 口唇部は、直立し、脚部に向かって緩やかなカーブを描く。脚部は、「ハ」の字状に開き、底部で、わずかに直立する。内外面ともへら状工具による整形で、良く研磨されている。整形の施法をみると、坏部は、内外面とも斜下方に、脚部は、上から下へ整形痕がみられる。脚内面は、刻み目痕が見える。胎土は、良く精選されている。焼成は、ひび割れが目立つが堅緻である。色調は、灰褐色を呈す。

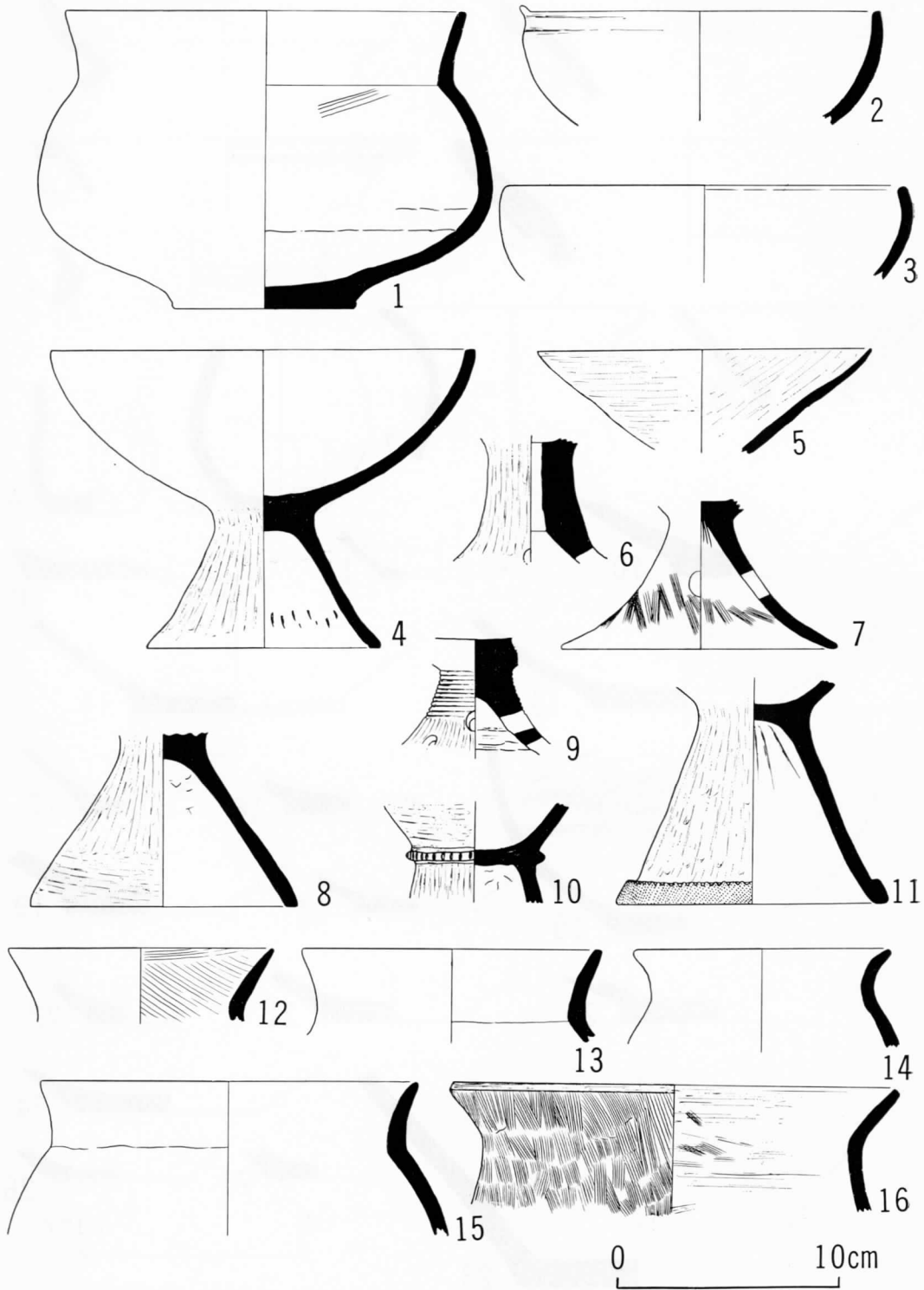
5. 口唇部から直線的にちぢまる坏部のみで、脚部を欠失している。内外面ともへら状工具による整形が施されている。胎土は密で焼成も良い。色調は、赤褐色を呈す。

6. 頸部のみである。中央に一孔を穿ち、器面は、へら状工具による研磨痕がみられる。脚部は、4孔を有している。胎土、焼成ともによく、赤褐色を呈す。

7. 「ハ」の字状に開く脚部で、3孔が穿たれている。内外面に櫛歯状工具による整形痕があ



第7图 B地区第1号方形周沟内出土土器



第8图 B地区第1号方形周沟内出土土器

る。胎土は砂粒子を含むが密である。焼成は良い。色調は、赤黄褐色を呈す。

8. 「ハ」の字状に、ほぼ直線的に開く脚部である。内外面ともにヘラ状工具による整形が施されており、胎土に微礫を含む。焼成は良好で、全体に作りは良い。色調は、淡黄褐色を呈し、部分的に丹が認められる。

9. 数状の沈線を有する脚部で、上下3孔ずつ、6孔が穿たれている。胎土は、良く精選されている。色調は、淡黄褐色を呈す。

10. 頸部は、一本の突帯を有するものである。突帯には、棒状工具による刻目がある。坏部は縦に、脚部は横にヘラ状工具による整形が施されている。胎土は、微礫を含むが密で、焼成も堅緻である。色調は、淡黄色を呈す。

11. 「ハ」の字状に、ほぼ直線的に開く脚部で、脚底部が、折り返えされている。この折り返えし部分には、極めて細い縄文がみられる。そして、その上端には、棒状工具による刻目がある。器面は、ヘラ状工具による整形が施されている。胎土は、微礫を含む。焼成は、ひび割れが目立つが堅緻である。色調は、赤黄褐色を呈す。

#### 甕形土器（第8図12～15）

12・13・14・15、いずれも口縁部と頸部のみである。頸部はゆるやかに「く」の字状に折れ口唇部で、わずかに外反するものである。ヘラ状工具による整形がみられる。胎土は、砂粒子を含む。焼成は堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。

#### 台付甕形土器（第8図16・第9図1～9）

16. 頸部が「く」の字状に折れ、口唇部は平坦で、稜線を描いている。器面全体に櫛歯状工具による整形が施され、内面にも淡い沈線が描かれている。口唇部は、横なで痕が見られる。胎土は精選されている。焼成は、堅緻である。色調は、淡黄褐色を呈す。

1・2. 口縁部は、いわゆる「S」字状で、頸部は鋭く、「く」の字状に折れている。2には、櫛歯状工具による施文が見られる。1・2いずれも胎土は精選されて密で、焼成は良好である。色調は、暗褐色を呈す。

3. 台付甕の脚部である。内面には櫛歯状工具による施文が見られ、脚の底部内側が折り返えされている。胎土は密で、焼成もよい。色調は、茶褐色を呈す。

4. 胴部以下を欠失している。頸部は、緩やかに「く」の字状に折れ、わずかに口縁部が外反する。内外面とも、櫛歯状工具による整形が施され、胎土も微礫を含むが密であり、焼成も器面にひび割れが目立つが堅緻で良好である。色調は赤褐色を呈す。

5. 脚部を欠失している。頸部は鋭く「く」の字状に折れ、口縁部は外反している。胴最大径が、上部にあり、そこから、緩やかなカーブをもって脚部へ移行する。内外面とも櫛歯状工具による施文が見られる。胎土は、微礫を含んでいるが、よく精選されている。焼成は、器面に荒れが見られるが、堅緻で良好である。色調は、茶褐色を呈す。

6. 胴上部を欠失している。脚部は、「ハ」の字状を呈するが、わずかに膨みをもっている。外



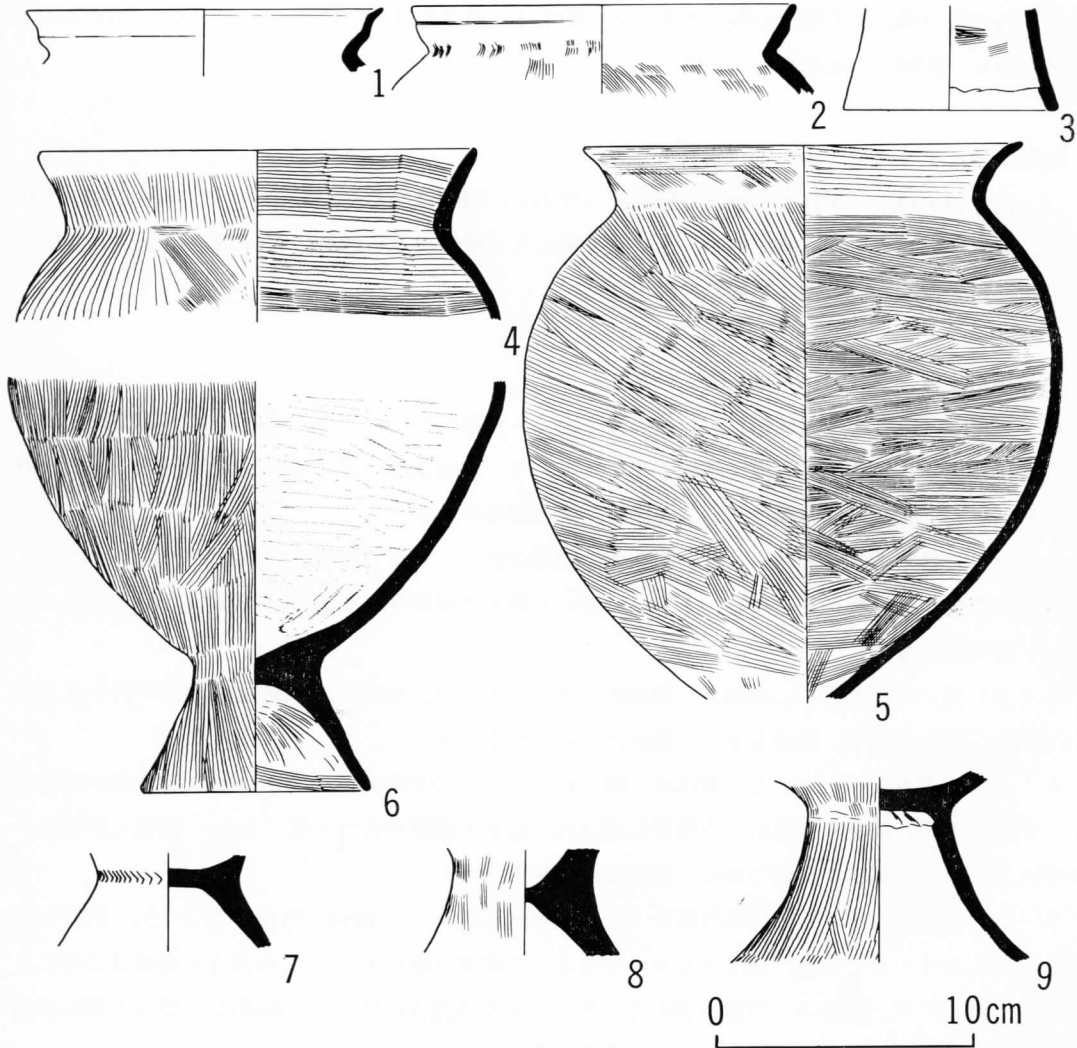
面は、櫛歯状工具による施文が見られるが、内面はへら状工具による整形が施されている。脚内面は、櫛歯状工具による削り痕が見られる。胎土は、砂粒子を含む。焼成は、堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。

7. 頸部のみである。この頸部には、逆「く」の字状の刻みがある。胎土・焼成ともに良好で、色調は黄褐色を呈す。

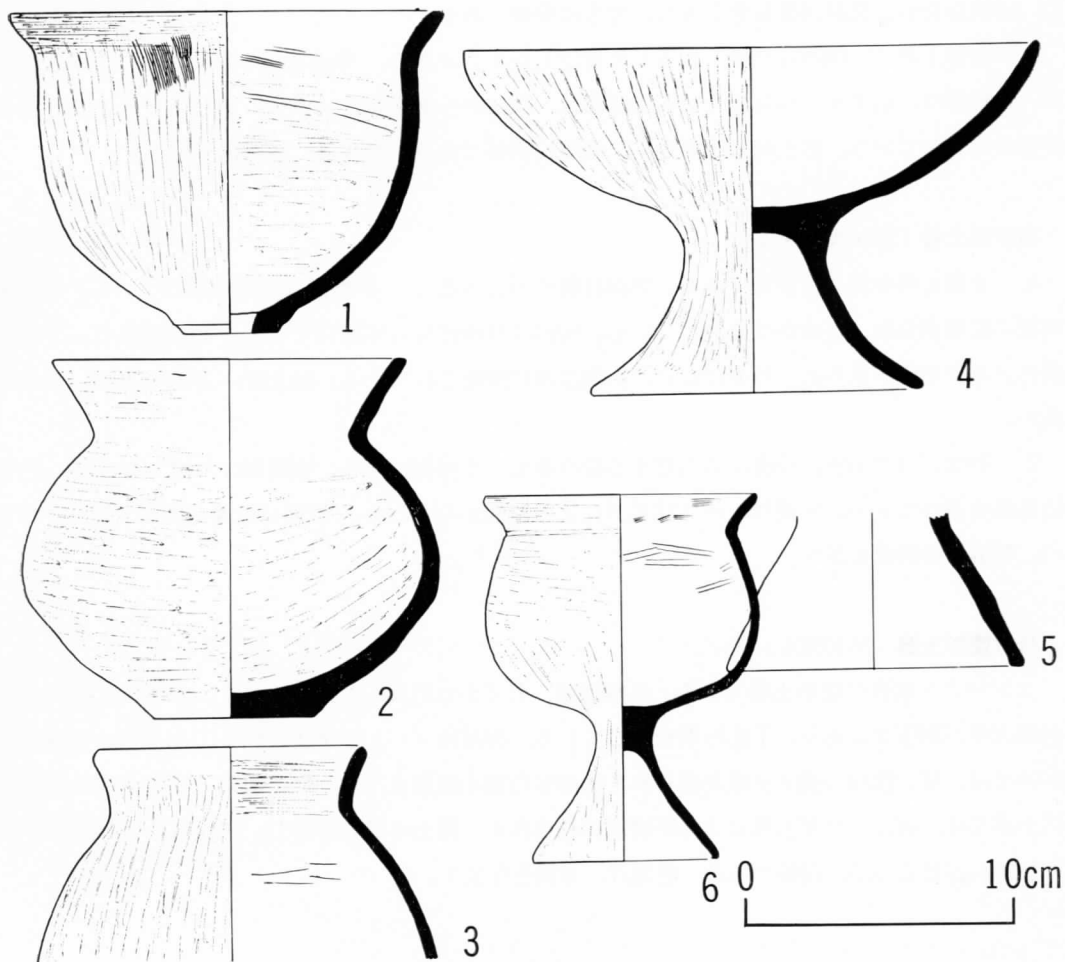
8・9. 櫛歯状工具による整形が施され「ハ」の字状に緩やかに外反する脚部をもっている。胎土は、砂粒子を含むが密であり、焼成は堅緻である。色調は8が黄褐色、9が赤褐色を呈す。

#### (4) B地区住居址出土の土器

本住居址南隅のピット内（貯蔵穴）に横転して甑セットが、明確な出土状態を呈して発見された



第9図 B地区第1号方形周溝内出土土器



第10図 B地区住居址出土土器

ので一括して説明する。なお、他の土器は、床面から出土したものである。

#### 甌セット（第10図1～3）

1. 甌形土器で、口縁部は緩やかに外反し、頸部から胴部へ垂直に移行する。胴部の最大径は上部にあり、胴部中央より底部に膨みをもって一段を有し底部にいたる。底部は、平底で、焼成前の穿孔があり、径は1.8cmを測る。器面は頸部から口縁部にかけて、横に淡い沈線の横ナデ痕が見られ、頸部では、その上部からヘラ状工具による整形痕が見られる。内面も横にヘラ状工具による整形が施されている。器面にはひび割れや荒れが見られる。胎土は砂粒を含むが密であり、焼成は良好である。色調は、茶褐色を呈す。

2. 壺形土器で、頸部は「く」の字状に折れ、口縁は、ほぼ直線的に斜上方に延びている。頸部から胴部にかけては、球形を呈すが、胴下半部は緩やかに底部へと移行する。胴部の最大径は、下半部にあつて、底部は平底である。器面には、胴部にヘラ状工具による整形痕がみられる。胎土

は、砂粒を含む、色調は淡黄色を呈し、焼成は堅緻である。

3. 甕形土器で、胴部を切断し台として使用したものである。頸部は緩やかに「く」の字状に折れ、口縁部は、わずかに外反している。器面は、頸部から胴全般にかけて、縦にヘラ状工具による整形が施されている。胎土は微礫を含み、焼成は良好である。色調は、茶褐色を呈す。

#### 高坏形土器（第10図4・5）

4. 全面に丹を施した土器である。坏部は緩やかに内弯し、口唇部は丸味を帯びている。坏部と脚部の接着部分は、緩やかに弯曲している。脚部は外側に反って開いている。器面全体にヘラ状工具による整形痕が見られ、外面は縦に、内面は横に整形されている。胎土は、砂粒を含む、焼成は良い。

5. 脚部だけである。中央から内弯する膨みをもって裾部に至る。裾端部は平坦であるが、内側は丸味を帯びている。内面は、ヘラ状工具による整形がみられる。器面は微礫が露出し荒れが目立つ。色調は赤褐色を呈す。

#### 台付甕形土器（第10図6）

コンパクトな台付甕形土器である。口縁部は、わずかに外反し、頸部は「く」の字状に折れ、胴部最大径が胴下半にあり、下膨れ形を呈している。脚部は「ハ」の字状に開く。口唇部から頸部にかけては、淡い沈線の横ナデ痕が見られ、頸部から胴中央部までは、斜め横に、胴中央部から脚部にかけては、縦にヘラ状工具による研磨痕が見られる。胎土は砂粒を含む。焼成は、器面に細かいひび割れが目立つが、良好である。色調は、赤褐色を呈す。

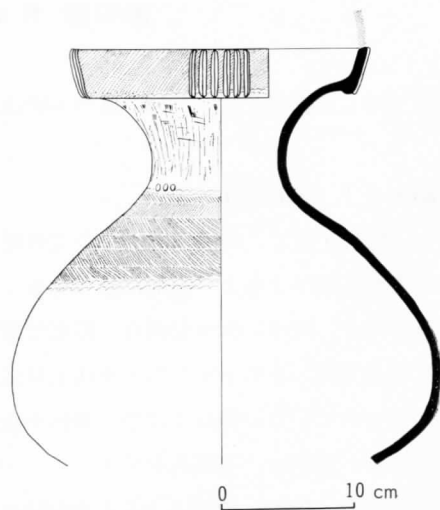
（附）

#### 塙構遺跡出土の土器（第11図）

口径22cmを測る大形の壺形土器であるが、底部を欠損している。

広い折り返えし口縁で、4か所に6本ずつの棒状の貼付がある。頸部は、緩やかな弧を描き口縁部がわずかに立ちあがり、頸部から胴部にかけて、緩やかなカーブをもつ。胴部最大径は、下半部にあり、いわゆる下膨れ形を呈するものである。

折り返えし口縁部には、細縄文が施文されており、肩部にも細縄文（LRとRLの2本立）が羽状に施され、頸部よりでは一段の、胴部よりでは二段のS字状結節文が細縄文を界している。また、肩部には三個を単位とする円形浮文が4か所に貼り付けられている。



第11図 塙構出土の土器

頸部と胴下半部、及び内面は、ヘラ状工具による整形が施され、良く研磨されている。

胎土は砂粒子の混入が見られるが、良く精選されており、焼成も良好である。器面全体には丹が塗られている。また、部分的にススの付着が見られる。

## お わ り に

戸田市鍛冶谷遺跡の第1次調査の概要は、以上のようなものである。

今回の調査は、偶然の土器発見から、低地帯の遺跡の性格を確認し、戸田市における、今後の埋蔵文化財保護の対策をたてるために行なったものであった。したがって、時間的な制約もあり、調査も充分ではなかった。

しかし、埼玉県内でも、県南の低地帯に、このような遺跡があり、予期しない事実が判明したことは、この調査をより有意義なものとした。すなわち、それは、標高5m弱の自然堤防上での、弥生時代後期中葉の方形周溝の発見と、竪穴住居址の発見であった。

方形周溝は、A・B両地区で発見された。A地区では、3基発見され、このうち、第1号方形周溝は、他の2基よりも規模が大きく、方形周溝特有の底部穿孔土器の良好な出土状態があったのみならず、方台部中央に、長方形の土壇も発見され、「墳墓」としての性格が強調された。他の2基は、出土遺物もないが、1号と同様、方形周溝墓と認められる。

この第1号方形周溝の溝内から出土した土器類は、大宮市の大宮公園内に発見された、方形周溝墓(註1)出土の土器よりも新しく、同市吉野原で発見された弥生町期のもの(註2)と同時期で、若し、前者を弥生町I期とするならば、後者は、弥生町II期とみてさしつかえなからう。なお、これらの問題については、後日にゆずる。

B地区の方形周溝は、全掘したものはないが、第1号方形周溝で、遺物が明確に2層にわたって出土したことは、今後問題が残る。出土遺物は、土器だけであったが、最下層(溝底)から出土した土器の中には、第8図9~11のような高坏形土器がある。これらの土器は、従来南関東では、住居址中からはあまり検出されなかったものの一群で、伊勢湾東岸から、天竜川東岸に多くみられる地域性の強い特殊なものであり、東海地方から移入され方形周溝「墓」に献置されたものであろうか。また、この報文では、鉢形土器として扱ったもの(第8図1)は、従来知られていない器形である点、注目されよう。

一方、上層の土器は、台付甕形土器が多く、方形周溝内から台付甕の出土は少なかったが、最近の発見例では、この現象が多くなっている。埼玉県でも、桶川町加納入山遺跡(註3)の方形周溝内からも多量に出土している。しかも、ここでは、関東地方において、五領I期に急速に流行したS字状口縁を呈するものがあるが、これが支配的ではない。したがって、東海系の影響の強い弥生的な性格を有する時期のものであり、弥生後期末に位置づけられるものと思われる。

住居址は、上部を削平整地されたために、壁を完全に検出することができなかった。しかし、床面の変化から、おおよそのプランを推定することは可能であった。出土遺物も、貯蔵穴内に甑のセットが発見され、その器形からすくなくとも、弥生時代には遡り得ないものである。すなわち、こ

の住居址は、五領Ⅰ期に比定してよからう。

鍛冶谷遺跡は、まだ、調査が始まったばかりで、昭和43年度には、この第1次調査で知り得た事実を、さらに確認する意味をもって、残された土地と、調査の完了していない遺構の完掘を目的とし、さらに、遺跡の立地する、自然堤防の時代による変化のあとをとらえるため、第2次調査が企画されている。したがって、これが終了した後に、県内はじめ、県外の類例遺跡の調査結果を駆使して、この遺跡の性格をあらためて解明してみたい。

註1 大護八郎「大宮公園弥生式時代竪穴住居跡発掘及復原報告書」昭和31年。

註2 小川良祐「吉野原遺跡」第1回遺跡発掘調査報告会発表要旨 昭和43年1月。

註3 昭和42年5月、筆者らが中心となって調査した。この方形周溝は、五領Ⅰ期に比定できる。

図版 I



↑ 遺跡遠景

→ A地区第1・2・3号方形周溝





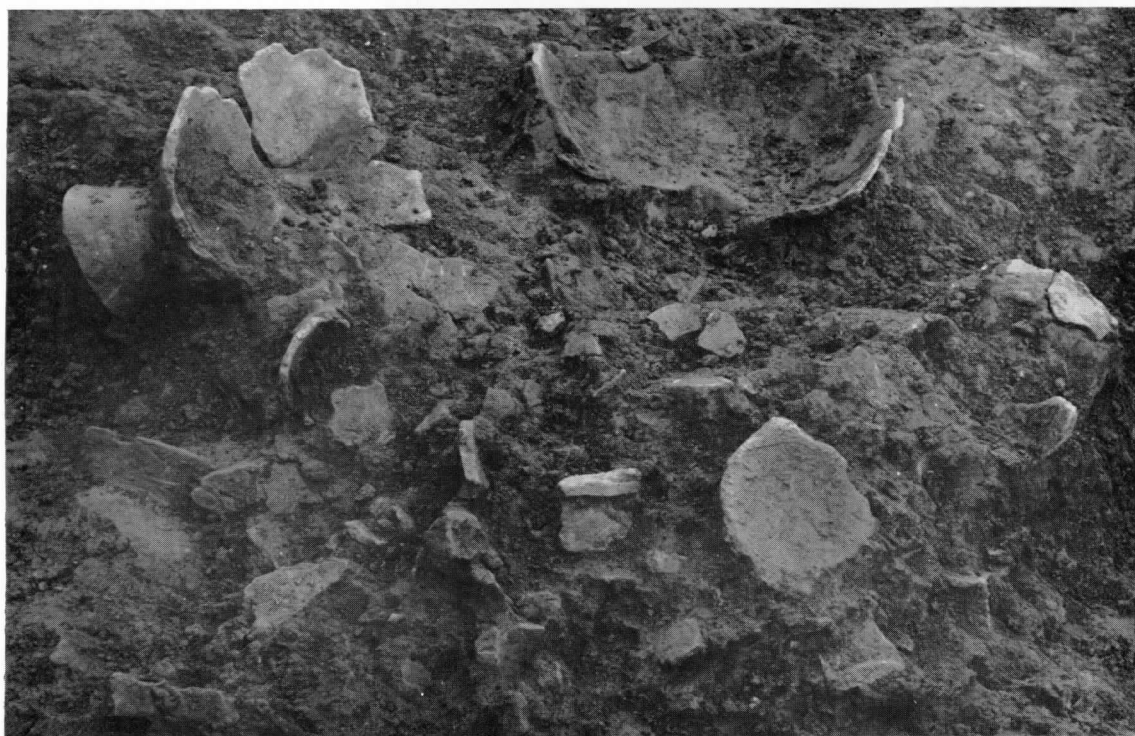
図版Ⅱ



← A地区第1号方形周溝の土器出土状態 ↓



→ B地区第1・2号方形周溝

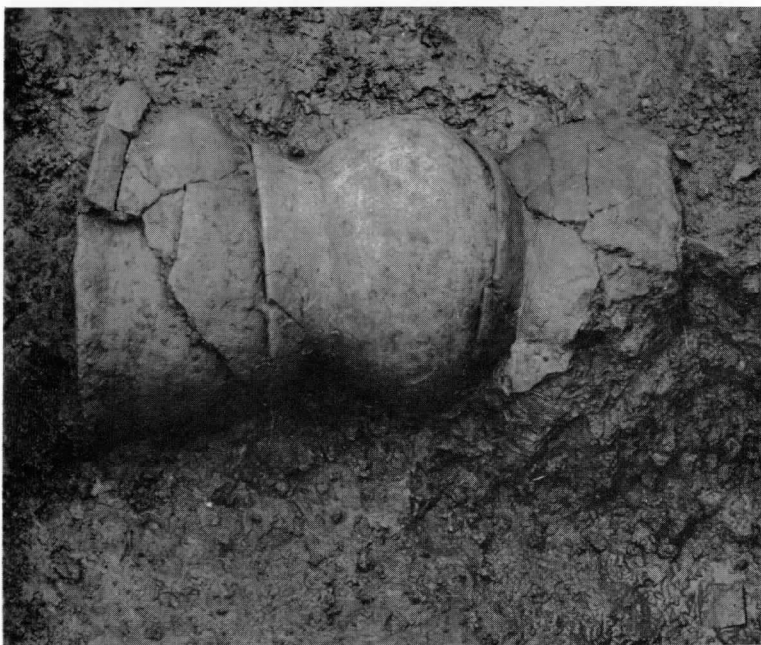


B地区第1号方形周溝の土器出土状態

図版IV



↑住居址



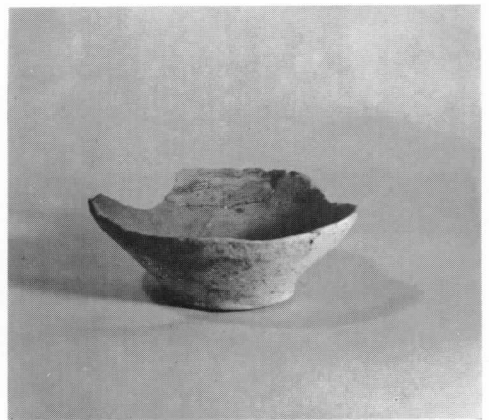
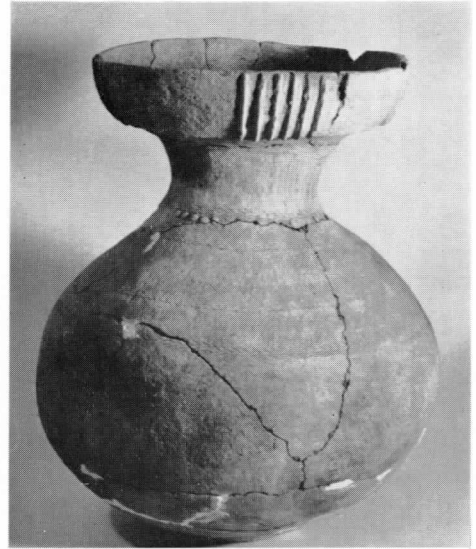
←甗セット出土状態

→  
小形台付甗出土状態





図版 V



A地区第1号方形周溝出土の土器



昭和43年3月25日印刷

昭和43年3月30日発行

戸田市文化財調査報告Ⅰ

鍛冶谷遺跡第1次発掘調査概報

発行 埼玉県戸田市教育委員会

印刷 (資) 秀飯舎印刷所



